

ジャングル

日本の過密都市では、健康な人でもまともに歩けないことがある。ましてからだの不自由な人にとって、日本はジャングルのようなところではないか。スウェーデンの町を歩きながらそう思った。

車イスで二階へも

スウェーデンについたばかりのころ、ホテルの部屋に入って、しばしばとまどった。照明のスイッチが見つからないのである。よく探してみると、日本のよりずっと下の方についていた。何日かたってそのナゾが解けた。車イスにすわった人がちょうど手の届くところにスイッチがつけられているのだ。

気をつけると、細かな心づかいは町中にあった。郵便ポストの口も低いところについていた。地下鉄の駅には、車イスのシンボルマークのついたエレベーターがある。それに乗れば階段を使わず地下のホームにおりられる。バスに乗ると、いちばん前に「からだの不自由な方のために」と表示のある席。スーパーマーケットに入ると傾斜のついた“動く歩道”のようなものがあって、車イスの人も乳母車を押したお母さんも、そのまま二階に上げられる。

住宅庁貸付助成部長のローバック氏に会ったとき、その話をしたら、ニッコリして答えた。「二年ほど前、法律が改正され、からだの不自由な人が利用しやすいように配慮されていなければ、おおぜいの人利用する建物は、建築許可がおりないことになったんですよ。どんなに豪華にできていても、身障者や老人だけの施設に入れられるのは、本人にとっては不幸です。なんといっても隔離なんですから。老人ホームや身障者施設はスウェーデンでは10年以上前から反省されています。からだの不自由な人でも暮せる町をつくらなくては……」

団地をつくるときには、その中に、目の見えぬ人、車イスの人でも使いこなせる台所や浴室のついた世帯が1-2割つくられる。古い家に住んでいる人には、改造費やエレベーターの取付けのための補助金が公費で出る。

食事は市で配達

ストックホルムなどでは、むずかしい台所仕事のできない重症者は、市に申込みと、毎日、温かい食事を運んできてくれる。スウェーデンでは、朝食と夕食は簡単にすませる人が多い。昼食を届けてくれれば、あとは何とか自分でやれる。

もっと重症で朝の洗面も入浴も1人ではできない人は、身障者協会に申込みと毎朝毎晩、アルバイトの介助者がきて、通勤するところまで世話してくれる。タクシーの無料クーポンも同協会が配っている。

ストックホルムの西のはずれにある身障者研究所では、身障者用補助器具に関する情報を世界中から集めていた。これはというものがあると、黙ってサンプルを買い、身障者グループに試してもらう。評判がよければ、かたいところに何度もたたきつけて耐久力テスト。そして、製造元に「この点を改良するなら政府が大量に購入するが」と注文をつける。改良されたものが届くと、再びテスト。合格すれば、それを必要とする身障者にタダで配られる。

手だけで動く車

「きょう試運転に成功したこの車の話をきいてください」と研究所のポイエル技師はいった。「足を使えぬ人が手だけで運転できる車は、今年も600台ほどつくられ、それを買うための補助金が公費ででています。でも、それは、ハンドルを動かす力のある人しか使えない。きょう試運転したこの車なら、手を10センチくらいしか動かせない人でも運転できるんですよ。」

私は日本の身障者のことを思った。車過密の日本では、ハンドルを回せぬほどの重症身障者に自動車免許を出すことがいいかどうか議論はわかれるかもしれない。しかし、それにしても日本の裁判所は、身障者であるというだけの理由で、ふつうの車をちゃんと運転できる人にまで、運転を許さぬ判決を下した。

日本の身障者

厚生省の1970年の調査によると、わが国には約141万人の身体障害者がいるという。だが、この数は欧米諸国に比べてはるかに少なく、調査の仕方に疑問の声もある。身障者は申請すれば身体障害者手帳が交付され、所得税の控除、国有交通機関などの料金割引、医療費補助などを受けられる。しかし、これは低所得者に限られている。